

音羽山觀音寺
訪相白



令和4年9月18日 発行者 一般社団法人桜井市観光協会



音羽山 観音寺

多武峰への道の途中、下居(おりい)の橋のたもとに「眼病靈驗音羽観音入口」とのブリキの大きな角標があります。更にその手前に「右たむのみね・・・左おとわかんのん・・・」とよめる元の石標が目につきます。

もう一つ「音羽山」と彫った一メートルほどの小さい石標をご覧ください。ここから谷あいをつづらおりの道の急坂を二キロあまり登った音羽山(八五〇メートル)の中腹に観音堂は建っています。登り口付近には案内看板と優しい気持ち伝わる参拝者の杖が置かれています。遠慮なくお借りして、周辺の草花や木々を見て、さわやかな空気を吸いながら観音寺を目指します。

途中には、手作りのベンチなどがあり、やさしいメッセージが書かれた看板も疲れた体を癒してくれます。

約四十分ほど歩くと、木立の中に一二二〇年以上の歴史を持つ観音寺が見えてきます。日頃忘れていた何かを思い起こさせてくれるような気持ちになれる古寺です。



音羽山



音羽寺までの道のり



音羽山展望台からの夕日

途中に南音羽の家々が点在しており、その間、お堂石段(浅古の辻政右工門寄進)下まで「音羽山一七夜：丁」としるした火袋を持つ笠塔婆型の「丁石」が十五基ほどあります。ただし笠のところごとくどこも無くなっています。橋畔から十八丁というから十八本は立っていたのであろうと思います。

境内には向かって右に大字の神社があり、ここも神宮寺のおもかげを伝えているところであるように思います。

その右谷間に音羽の滝の霊水が落下しています。

お堂から右方向へ登っていくと展望台までの道が整備されていて、桜などが沢山植樹されています。

以前、協会職員が登った時にはこの厳しい坂道でお寺のお手伝いの方が、せせと植樹のお手伝いをされておられました。

私たち訪問者が楽しめるようにとの思いで頑張ってくださいました。

この展望台からは金剛、葛城が遠望されて素晴らしい景色をみることができます。また右寄り目前には御破裂山が見えます。

ここが藤原鎌足と中大兄皇子が蘇我入鹿を倒すための密談の場所と言い伝えられています。(大化の改新)

この本尊は、千手千眼十一面観世音菩薩であまねく眼病に靈驗あらたかと伝えられ、開基を奈良朝の孝謙天皇天平勝宝元年といわれます。

しかし寺伝によると、多武峰の定慧上人が、藤原鎌足公を談山妙楽寺(現代の談山神社)にお祀りした際、その表鬼門東北に当たるこの地に当寺を造り、鎌足公自作の梅の木のお観音像を安置したのが始めと伝えられています。そして裏鬼門(西南)が冬野(明日香村)の観音堂であり、更に東に鬼門除けの納経をしたのが、経が塚だといわれています。

奈良時代の観音信仰が篤かった頃は、霊場として賑わい、壮大な堂宇がこの山中に軒を連ね、その有様は、音羽百坊と称されました。「多武峰(とうのみね)略記」には天平寛宝元年(七四九年)に、心融法師が当山を創建したとの記述がありますが、京都清水寺の開祖延鎮僧都が靈感を得て堂宇を建立したのが始まりとの記録もあります。



清和天皇の貞観十八年(八七六年)の「音羽流れ」と記録に残る豪雨と山津波で堂宇が崩壊し、残ったのがこの観音寺であると伝えられています。

寺名も香法寺、善法寺と変わりながらも、眼病平癒に靈験があり「音羽の観音さん」と親しまれ、訪れる信者で賑わい、多くの信者の力で維持されて現在にいたります。

今のものは、徳川末期寛政六年(一七九四年)の再建で、融通念仏宗であるが、古くは法相宗、天台宗、真言宗にも属していました。また京都の音羽山に対し、南の音羽山ともいわれています。(桜井町史)

平成の大修復で解体修理された際、台座から「隆平永寶」が多量に出土し、延暦十五年(七九六年)頃の鑄造と言われています。また同時に頭部からは、京都の清水寺との関連を示す墨書きも発見されています。

音羽観音の大般若会

本新西国十七番札所の音羽観音(南音羽)では毎年四月十七日が縁日にあたり、大般若経の転読法要があります。

お堂前向かって左に「大般若修行」と墨書した木札が下がっていて、参拝者にぎわいます。

般若経は紀元前後頃に成立しました。唐初の玄奘(三蔵法師)が漢訳【大般若 波羅蜜多経】六〇〇巻にまとめました。

この「大般若会」は護国除災のために催されるものでありますが、全部読誦するには何日もかかるので、始めと終わりの一部だけ略読して、一帖ずつ両手に受け繰り広げてはたんだんと次々にうつり、僧が大声を張り上げながら六〇〇巻をおえるものであります。

桜井風土記より引用



観音寺お堂内



音羽山展望台からの景色